

# 虹

扶桑社通信 Vol.11  
平成21年冬号



## 巻頭言 国家と共同体—曾我ひとみさんの再生

拓殖大学学長 渡辺 利夫

二つのことを述べてみたい。

国家を国家と呼びうる最低限の条件は、国民の生命と財産の守護である。北朝鮮による拉致被害者の救出問題は、日本が果たして国家と称される存在たりうるか否かを問う試金石である。平成14年9月に5名の被害者の帰国が成ったが、日本政府の拉致被害者認定者は17名である。拓殖大学の荒木和博教授を代表とする特定失踪者調査会は、昨年末、34名の拉致の可能性の高い人々の名前を発表した。それまでの発表者と合わせて70名であるが、状況証拠からみて被害者は他にも相当数いるとみられている。

明らかなことは、国民の生命が犯罪国家によって危殆に瀕しても、国家がこれに全力をもって立ち向かってはいないことである。六者協議などという当てにならないものに期待を寄せても詮方ない。一体、日本は国家か。確かに経済不況も年金の将来も疎かにされていい問題ではないが、さりとてこれによって国家の存在が否定されるわけのものでもない。しかし拉致とは国家存在の本質に関わる問題に他ならない。万が一、自分の身にそうした事態が発生した場合、日本という国家は果たして自分を救出してくれるかと思わされた日本人は少なくなかつ

たであろう。そう思われたら国家という存在はただの空疎である。

そういいながら私は、曾我ひとみさんのことが頭をよぎる。不安で引きつったような表情をして空港を降り立った曾我さんが、郷里の佐渡の縁者や友人に囲まれながら少しずつ、少しずつやさしく、ふくよかな顔に変じていくさまを追っていくと、どんなに酷薄の運命を担った人でもこれを再生させるものが共同体の中に存在し、その共同体が日本の中にも確かに残されているのだという誇らしい気持ちになる。曾我さんはこううたっていた。“人びとの心／山川谷／みんなあたたかく美しく見えます／空も土地も木もささやく／「お帰りなさい」「がんばってきたね」と／帰ってきました ありがとう”

日本人の多くが拉致被害問題を忘

れることができないのは、これが国家の本質に関わる深淵であることを本能的に嗅ぎ取っているからであり、また帰国した被害者の再生の中に日本人が長らく忘れてきた共同体のもつもう一つの深淵をみているからなのであろう。

国家意識の重要性。しなやかな共同体が日本の社会を支える基盤だということを若者の心に響くよう記述されることを、新しい教科書に期待する。



渡辺利夫(わたなべ・としお)  
昭和14年生まれ。慶應義塾大学経済学部卒。同大学院博士課程修了。経済学博士。現在、拓殖大学学長。近著に「新脱亜論」(文春新書)、「中国は歴史に復讐される」(育鵬社)。

おろそ